

幼児教育学科における推薦選抜の研究

藤田 勉* 川島 真**

On the System of Selecting Candidates Recommended from Their High Schools for the Department of Early Childhood Education

Tsutomu FUJITA* and Makoto KAWASHIMA**

Two studies were performed to reconsider the system of selecting candidates recommended from their high schools for the department of early childhood education. In study I, the personality traits of college students were investigated with egograms, psychological tests based on the theory of transactional analysis. Compared with the students who passed the entrance examinations (achievement tests), the personality traits of the students admitted to the department by recommendations had a tendency to get higher "NP (Nurturing Parent)", "A (Adult)", "FC (Free Child)", and lower "AC (Adapted Child)" scores over two years. The results seemed to imply that the personality traits of candidates might tacitly be one of the criteria for selection by the judges (department staffs). In study II, scholarly attainments of students after being admitted to college were examined. Scholarly attainments of students admitted by recommendations didn't significantly differ from those of students who passed the entrance examinations.

Key Words: system of selecting candidates recommended from high school, department of early childhood education, personality trait, egogram, scholarly attainment

目 的

近年、推薦選抜を実施する大学や短期大学が増えている。平成5年度入学者選抜では9割を越える大学・短期大学で推薦選抜が実施されており、また、入学者に占める推薦入学者の割合も年々増加の傾向にある(大学審議会, 1993²⁾; 橘高, 1993⁷⁾; 高等教育局大学課大学入試室, 1993b¹⁰⁾)。幼児教育学科に

おいても将来保育者になることを希望する意欲ある学生を1回の学力検査だけで適格に選抜するのは困難であり、保育者としての資質や適性などを多面的に評価する意味でも推薦選抜の導入が必要であると思われる。しかし、これまで幼児教育学科の推薦選抜について組織的に検討した研究はなく、現時点では有能な保育者を育成する上で推薦選抜がどのような役割を果たし得るか判断することはできない。本

* 長野県短期大学

** 尚美学園短期大学

研究は、こうした現状に鑑み幼児教育学科における推薦選抜の在り方をとらえ直すことを目的に二つの調査を行った。

調査 I

大学審議会は平成5年9月の報告「大学入試の改善に関する審議のまとめ」の中で推薦選抜の意義について言及し、①1回限りの学力検査では評価し難い受験生の高等学校在学中の学習成績やその他の能力・適性等を適切に評価できる、②受験生を受験のための勉強から解放することができる、③一般入試とは異なる尺度で受験生の能力・適性等を多面的に判定することで、各大学がそれぞれの学部・学科の目的にふさわしい学生を選抜できる、などの点を推薦選抜の意義としてあげている(大学審議会, 1993²⁾)。幼児教育学科においても、保育者に必要であると想定される資質、能力、適性など一般入試では評価し難い学生側の変数を選抜の基準に加えることができる点は大きなメリットであるが、このような変数を客観的かつ公正に評価することは非常に難しい。どのような資質、能力、適性が保育者に必要であるのか、また、何をもちて保育者に必要な資質、能力、適性の尺度とするかについてはこれまで統一した見解はなく、そのため実際の推薦選抜においては評価の基準が主観的で不明確になりやすい。こうした状況の中、推薦選抜の評価基準に暗黙のうちに影響を及ぼしていると思われるのが、保育者として一般的に好ましいとされる性格イメージである。一般的に、良い保育者は「明るく元気である」、「世話好きでやさしい」といった性格に関するステレオタイプがあるが、そうした性格特性を持つ学生は推薦選抜において高く評価されやすいことが推測される。つまり、幼児教育学科の教員はこうした性格特性を面接や高等学校からの資料などを通して推し量り、保育者としての資質、能力、適性の一つの指標としていと考えられる。逆に言えば、推薦選抜で入学した学生の性格特性を詳細に分析することで、幼児教育学科の教員が性格特性についてどのような基準で推薦選抜を行っているかが明らかになるとと思われる。このことを調べるため、調査 I では推薦選抜により入学した学生の性格特性を調べた。また、その結果を一般入試入学者の性格特性と比較し、両者の間に何らかの違いがあるか否かについても検討した。

学生の性格特性を調べる際にはエゴグラムを用いた。エゴグラムは交流分析の理論に基づいてアメリカの医師デュセイ(Dusay, J. M.)によって開発されたもので、人間の自我状態を批判的な親の自我状態(Critical Parent: CP)、養護的な親の自我状態(Nurturing Parent: NP)、大人の自我状態(Adult: A)、自由奔放な子供の自我状態(Free Child: FC)、順応した子供の自我状態(Adapted Child: AC)の五つの尺度で計る自己分析法である(e.g., 芦原, 1992¹⁾; Dusay, 1977³⁾; 桂, 1986⁵⁾)。我が国では心療内科などの分野で広く用いられ、自我状態のバランスをより望ましい方向へ変容させる際の一つの指標として利用されている。

方法

対象者 地方都市にある公立短期大学の幼児教育学科に在籍する女子短期大学生87名(平成6年3月現在)を対象に調査を行った。87名中43名が平成4年度入学者、残り44名が平成5年度入学者である。平成4年度には10名が推薦選抜で入学し、33名が一般入試により入学した。また、平成5年度は11名が推薦選抜、33名が一般入試で入学した。推薦選抜は毎年11月中旬に実施されるが、審査は幼児教育学科の教員6名によってなされ、書類審査(高等学校での特別活動、行動および性格の記録、志望理由書など)、小論文、面接の総合評価で選考を行う。出願資格(推薦条件)は「県内の高等学校を卒業した者および卒業見込みの者」で、「幼児教育に関心を持つ意欲ある女子」であり、他の多くの大学・短期大学の推薦選抜で採用されているような高等学校における評定平均値による足切りはない。一方、一般入試は推薦選抜のおよそ3ヵ月後の2月中旬に実施され、3科目(英語と国語、および日本史、世界史、数学、生物の中から1科目を選択)の学力検査の合計得点で入学者が決定する。

手続き 対象者にエゴグラム・チェックリスト(山本, 1990¹⁴⁾)を配付し回答してもらった。エゴグラム・チェックリストには、CP, NP, A, FC, ACの五つの尺度についてそれぞれ10問ずつの質問項目があり、それらの質問に対して「はい(O)」、「いいえ(X)」、「どちらともいえない(Δ)」のいずれかで答えてもらうようになっている。対象者が50問の質問項目全てに記入し終えたらチェックリストを回

収し、○を2点、△を1点、×を0点として尺度ごとに得点を合計した(各尺度20点満点)。調査Iでは、推薦入学者と一般入試入学者間のエゴグラム・パターンの違いを比較・検討するため、両グループの得点を尺度別に平均した。

結 果

平成4年度入学者のエゴグラムの結果を、推薦入学者、一般入試入学者別に図示したのが図1である。図1では、縦軸にエゴグラムの得点、横軸に自我状態の五つの尺度が示されている。図1を見ると、パターン自体は推薦入学者も一般入試入学者もNPとFCが高く、CP、A、ACが低いいわゆる“M型”(芦原, 1992¹⁾; 桂, 1986⁵⁾)であるが、全体的に推薦入学者の得点が一般入試入学者の得点を上回っているようである(五つの尺度の平均は、推薦入学者が13.04点、一般入試入学者が11.59点)。尺度別に見ると、CP、NP、A、FCの四つの尺度では推薦入学者の平均得点が一般入試入学者の平均得点を上回っており、逆にACについては一般入試入学者の平均得点が推薦入学者よりも高くなっている。両グループのエゴグラム・パターンから判断すると、推薦入学者は一般入試入学者に比べ、“自分にも他人にも厳しく批判的”、“やさしく世話好き”、“合理的で冷静”、“明るく自由奔放”であるが、一般入試入学者ほどは順応性(“素直さ”、“おとなしき”)がないということになる。各尺度の平均値および標準偏差をもとに推薦入学者と一般入試入学者間で平均値の差の検定(ウェルチの検定)を行った結果、CP ($t=4.00, p<.01$), NP ($t=2.37, p<.05$), FC ($t=2.88, p<.05$)

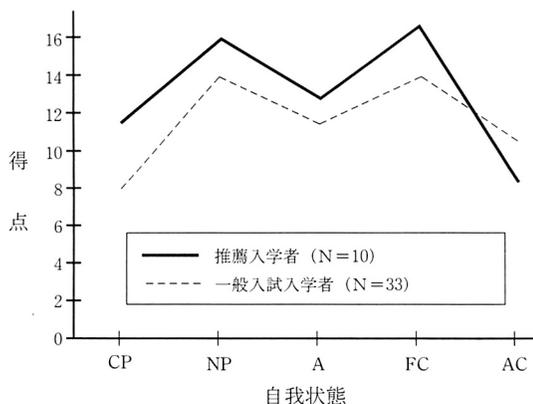


図1 幼児教育学科平成4年度入学者のエゴグラム

の三つの尺度において有意な差がみられた。

平成5年度入学者のエゴグラムの結果が図2である。図2では、図1と同様、推薦入学者、一般入試入学者別に各尺度の平均値がプロットされている。図2を見ると、平成4年度入学者の場合と同じく、全体的なパターンは推薦入学者、一般入試入学者ともに“M型”であることがわかる。尺度別に見ると、NP、A、FCの三つの尺度で推薦入学者が一般入試入学者を上回り、逆にCPとACでは一般入試入学者の方が推薦入学者よりも平均得点は高かった。両グループのエゴグラム・パターンから判断すると、推薦入学者は一般入試入学者に比べ、“やさしく世話好き”、“合理的で冷静”、“明るく自由奔放”であるが、批判性と順応性は一般入試入学者の方が高いということになる。ただし、推薦入学者と一般入試入学者の得点差は平成4年度入学者ほど小さくなく、五つの尺度すべてにおいて統計的に有意な差は認められなかった。

平成5年度では推薦入学者と一般入試入学者間で尺度別得点差に統計的有意差は認められなかったが、全体的には平成4年度と平成5年度で類似した傾向が見られた。平成4年度入学者と平成5年度入学者に共通して見られる特徴は、推薦入学者の方がNP、A、FCの三つの尺度で得点が高く、逆にACは一般入試入学者の方が高いという点である。すなわち、推薦入学者の方が一般入試入学者に比べ“やさしく世話好き”、“合理的で冷静”、“明るく自由奔放”という性格特性を強くもつが、“素直でおとなしい”という性格特性は逆に一般入試入学者の方が強いことがエゴグラム・パターンから判断できる。

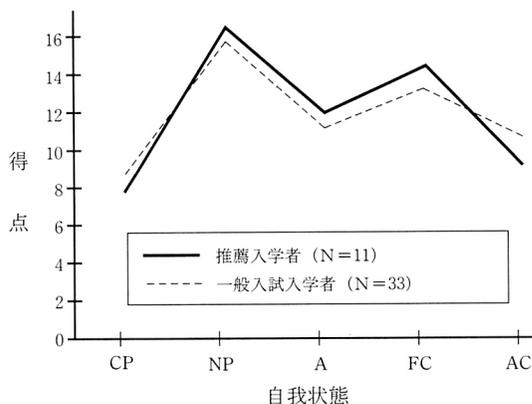


図2 幼児教育学科平成5年度入学者のエゴグラム

考 察

調査Ⅰでは、平成4年度入学者と平成5年度入学者の性格特性をエゴグラムでとらえ、推薦入学者と一般入試入学者間で性格特性の違いを検討した。その結果、CP以外の尺度については平成4年度入学者と平成5年度入学者の間で同様な傾向が認められた。これは幼児教育学科の教員が性格特性に関してある程度一貫した基準で推薦選抜を実施していたためであると思われる。教員が暗黙のうちに学生の性格特性を保育者としての資質、能力、適性を評価する際の一つの指標としてとらえていることが推測される。調査Ⅰにおいては、“やさしく世話好き”、“合理的で冷静”、“明るく自由奔放”といった性格特性を強く持つ学生が推薦選抜で選ばれやすいことが示されたが、こうした性格特性は一般的に考えられている良い保育者の性格イメージと重なる。こうした性格に関するステレオタイプが推薦選抜の判定基準に影響を及ぼしている可能性は大きいと思われる。

調 査 Ⅱ

推薦選抜を導入する際危惧される点の一つにあげられるのが推薦入学者の学力不足である。すなわち、推薦入学者は一般入試入学者のように学力検査で選抜されていないため、入学後の学習についていくだけの基礎学力が一般入試入学者に比べ欠如している可能性がある。特に、本研究の対象となった幼児教育学科のように高等学校の評定平均値による足切りを実施していない場合には、推薦入学者と一般入試入学者間で入学後の学業成績に大きな差が生じることも予想される。そこで調査Ⅱでは、推薦選抜で入学した学生の入学後の学業成績について追跡調査し、一般入試入学者の学業成績と比較した。

方 法

対象者 調査Ⅰの幼児教育学科に在籍する女子短期大学生および学科卒業生131名（平成6年3月現在）を対象に調査を行った。131名中44名が平成3年度入学者、43名が平成4年度入学者、残り44名が平成5年度入学者である。平成4年度および平成5年度の入学者は調査Ⅰの対象者と同一である。平成3年度には10名が推薦選抜で入学し、34名が一般入試で入学した。この学科では平成3年度より推薦選抜制度

を導入しており、平成3年度に推薦選抜で入学した10名の学生が推薦入学者の第1期生になる。平成3年度における推薦選抜の評価項目および一般入試の受験科目は前述（調査Ⅰ）の平成4年度、平成5年度と同じである。

手続き 各年度入学者を推薦入学者と一般入試入学者に分け、入学後の学業成績（「優」、「良」、「可」の数）を調べた。平成3年度入学者と平成4年度入学者は1・2年時の2年間の学業成績、平成5年度入学者については1年時の学業成績を集計し、推薦入学者、一般入試入学者別に「優」、「良」、「可」の数を平均した。

結果と考察

表1～3に各年度入学者の学業成績を示す。表1～3中の平均値と標準偏差をもとにt検定を行った結果、いずれの年度でも推薦入学者と一般入試入学者間で「優」の数、「良」の数、「可」の数に有意な差は認められなかった。推薦入学者と一般入試入学者の入学後の学業成績には明白な差はないようである。学力検査で選抜された一般入試入学者に比べ推薦入学者の基礎学力が劣り、それが学業成績の差となって現われるのではないかという懸念は調査Ⅱの結果を見る限り杞憂だったようである。調査Ⅱにより、推薦選抜において学力検査を実施しなくても、幼児教育学科のカリキュラムを消化する上で一般入試入学者と同程度の力を持つ学生を選抜できることが明らかになった。この結果は、推薦入学者の学力不足という危惧を払拭するものではあるが、その反面で学力検査を実施することの意味、すなわち一般入試を行うことの意味を考えさせる結果でもある。

全体の考察

推薦選抜制度を導入する大学・短期大学が増加する中、一部の大学・短期大学では、①非常に早い時期に推薦選抜を実施し、②一般入試と同程度の学力検査を課し、③入学定員の大半を推薦入学者で占めるなど、推薦選抜制度を単により多くの学生を早期に確保するための手段として利用しているところもある（大学審議会、1993²⁾）。こうしたいわゆる“推薦選抜のゼロ次入試化”傾向に対し、大学審議会は、①学力検査の免除を徹底する、②受付開始時期を一定の時期以降に限定する、③入学定員に占める推薦

表1 平成3年度入学者の学業成績(1・2年時)

人 数	「優」の個数		「良」の個数		「可」の個数		
	平 均	s. d.	平 均	s. d.	平 均	s. d.	
推薦入学者	10	21.10	4.25	12.40	3.24	1.50	2.01
一般入試入学者	34	19.71	5.40	12.91	4.13	2.18	1.42

表2 平成4年度入学者の学業成績(1・2年時)

人 数	「優」の個数		「良」の個数		「可」の個数		
	平 均	s. d.	平 均	s. d.	平 均	s. d.	
推薦入学者	10	21.40	4.43	9.00	3.16	1.50	1.43
一般入試入学者	33	18.42	4.52	11.15	3.34	2.55	2.05

表3 平成5年度入学者の学業成績(1年時)

人 数	「優」の個数		「良」の個数		「可」の個数		
	平 均	s. d.	平 均	s. d.	平 均	s. d.	
推薦入学者	11	7.36	2.91	4.09	2.07	1.73	1.10
一般入試入学者	33	6.79	2.72	4.36	2.13	1.33	1.24

入学者の割合は、大学については3割、短期大学については5割を越えないことをめやすとするなどの改善策を提起し(大学審議会, 1993²⁾), それを受け文部省も平成7年度の入学者選抜から改善指導を強化する方針をうちだしている(高等教育局大学課大学入試室, 1993a⁹⁾, 1993c¹¹⁾)。このため大学や短期大学は、今後これらの条件のもとで独自の推薦選抜を実施することになるが、推薦選抜をより適切なものにするためには各大学・短期大学がそれぞれの目的に応じた評価項目・評価基準を明確にした上で、推薦入学者の入学後の実態を追跡調査し、推薦選抜の方法を定期的に見直す必要がある。

本研究では、地方都市にある一短期大学を例にとり幼児教育学科の推薦選抜に関して二つの調査を行った。調査Iでは、推薦選抜で入学した学生は年度間である程度共通した性格特性を持ち、それは一般的に良い保育者として好ましいとされる性格特性であることが示された。このことは受験生の性格特性が暗黙のうちに推薦選抜における一つの選考基準となっている可能性を示唆するものと思われる。調査IIでは、入学後の学業成績を「優」、「良」、「可」の数でとらえ推薦入学者と一般入試入学者との間で差があるか否かを検討したが、両者の間に明白な差は認められなかった。本研究の結果に対しては様々な解

釈が可能であり、本研究だけからこの学科の推薦選抜の是非を論じることにはもちろんできない。推薦選抜においてどのような方法で学生を選抜し、その選抜方法をどういった形で見直すかは、その学科の目的によっても異なるし、カリキュラムの内容や教員の教授方法などとも密接に関わってくる問題である。したがって、いずれの学科においても推薦選抜の方法の是非を一朝一夕に判断することはできないが、できるだけ多くの客観的データを収集し、それらを総合的かつ長期的に検討していくことで推薦選抜をより実りあるものとすることができると思われる。本研究はそうした試みの一つとして位置づけられる。

昨今、大学・短期大学等の高等教育機関では教員の教育研究活動の自己点検・自己評価の必要性がさげばれ(喜多村, 1992⁶⁾; 高等教育研究会, 1991⁸⁾), すでに多くの大学・短期大学でそのための学内体勢が整いつつあるが(高等教育局大学課大学入試室, 1993b¹⁰⁾; ライオン企画, 1993¹³⁾), 推薦選抜を含めた入学者選抜の方法を見直すことも自己点検・自己評価の一つであると考えられる。特に、有能な保育者を育成し、保育の現場に送り出すことが使命である幼児教育学科においては、入学の段階で保育者を志望する意欲ある学生を選抜することが入学後の教育効果を高める上でも非常に重要である。動機が希

薄な学生や子供との交流経験のないまま入学する学生が増えている現状(石垣, 1994⁴⁾; 中田・阿部・永井・光岡・大井, 1987¹²⁾)を考慮すると, 現行の入学者選抜の方法を様々な視点から見直すことが急務であると思われる。

文 献

- 1) 芦原 睦 自分がわかる心理テスト 講談社 1992.
 - 2) 大学審議会 大学入試の改善に関する審議のまとめ(報告) 大学審議会ニュース, 1993, 12, 23-48.
 - 3) Dusay, J. M. Egograms: How I see you and you see me. Harper & Row, New York 1977. (池見西次郎監修, 新里里春訳 エゴグラム 創元社 1980.)
 - 4) 石垣恵美子 少子化時代の保育者養成をめぐって 日本保育学会会報, 1994, 98, 3.
 - 5) 桂 戴作 自分発見テスト 講談社 1986.
 - 6) 喜多村和之 大学評価とはなにか 東信堂 1992.
 - 7) 橘高重義 大学入試の改善 大学と学生, 1993, 340, 5-9.
 - 8) 高等教育研究会(編) 大学の多様な発展を目指して I-大学審議会答申集 ぎょうせい 1991.
 - 9) 高等教育局大学課大学入試室 「大学入試の改善に関する審議のまとめ(報告)」について 大学と学生, 1993a, 338, 24-25.
 - 10) 高等教育局大学課大学入試室 大学改善の推進について 大学と学生, 1993b, 338, 37-43.
 - 11) 高等教育局大学課大学入試室 大学入試改善のあゆみ 大学と学生, 1993c, 340, 36-45.
 - 12) 中田カヨ子・阿部明子・永井千恵子・光岡攝子・大井晴策 保育職に対する学生の意識の変化 保育者養成-保育学年報 1987 年版, 1987, 48-58.
 - 13) ライオン企画(編) 大学新世紀ユニバーシティ・ルネッサンス '93 扶桑社 1993.
 - 14) 山本晴義 人間関係ゲーム 廣済堂出版 1990.
-